

学生発案型授業に参画した学生はどのような変化を実感したか —学生自身が参画動機と変化を語る—

宇都宮大学

石井和也・岡田工平・小波津千里・中玲蘭

1 はじめに

宇都宮大学では、「新たな地域社会を創造する3C(Challenge・Change・Contribution)人材の養成—アクティブ・ラーニングの体系化と行動的知性学修評価システムの開発—」と題し、(1)アクティブラーニングの深化と拡充、(2)FDの推進による教員集団の一層の教授能力・資質の向上、(3)個々の授業科目を越えた大学教育のカリキュラム・マネジメントの確立と学修到達度可視化システムの開発に取り組んできた。

本報告では、これらの事業のうち(1)および(2)に関連する「学生発案型授業」の実践を取り上げる。「学生発案型授業」は、学生自身の能動的な学びを促すとともに、「学生参画型FD」の一種としても機能する可能性を持つものである。本学での「学生発案型授業」の実践を、授業に参画した学生と担当教員が報告し、上記の可能性について議論する。

2 宇都宮大学の学生発案型授業「理想の授業」の特徴

宇都宮大学の学生発案型授業「宇大生の宇大生による宇大生のための理想の授業」（以下、「理想の授業」）は次の特徴を持つ。

まず、学生（SA）が主体的に授業のテーマ設定やシラバスの設計、さらには授業の実施に至るまで、授業前の約1年間を学び合いと準備作業に費やししながら、教員と協働し授業全般に深く関与するという点である。これは他大学にける同種の授業と共通する点である。

その一方で、「理想の授業」は他大学のものとは異なる特徴がある。それは、授業当日に学内教員や外部ゲストを招聘することなく、授業準備を行ってきたSA自身が、授業テーマに沿った話題提供を行い、受講生とともに学び合うという点である。すなわち、「理想の授業」に参加する学生は、学生という同一の立場でありながら、授業進行を担う学生（SA）と受講生という二つの役割に分かれ、それぞれの役割を果たすことを通じて（異なる役割を担う学生同士の相互作用を通じて）学びを深めていくことになる。

なお、上記の特徴を持つがゆえに、「理想の授業」においては、何らかの専門的な知識を習得することは目的とせず、大学での学び方の修得や、社会の一員として私たちが暮らす社会で生起する様々な問題に対して関心を深めていくことを目的としている。

本報告では、「理想の授業」に参画した学生が、ピアサポートやファシリテーションのスキル、「最後までやり抜く力」等を高めることができたということを紹介する。同時に、学生自身の声を交えながら、「理想の授業」のような学生発案型授業が学生の能動的な学びをいかに促進するかということと、大学教育の改善にいかに寄与するかということについて報告する。

3 本報告の特徴

「理想の授業」に参画する学生は、本授業への参画のみならず、「学生FDサミット」への参加やラーニング・コモンズ学生スタッフとしての活動など、大学教育の改善について学生の立場から能動的な活動を行なっている。こうした諸活動に加わるために、学生はなぜ多大な時間と労力を大幅に割くこととし、活動の結果どのような変化があったと自己認識しているのか、学生自身の率直な語りを聞くことができる点に大きな特徴がある。